2017 弥生の夢「法隆寺 再現 釈迦三尊像展」

「法隆寺 再現 釈迦三尊像展」、2017 年 3 月 18 日の夕刻、拝観してきました。「釈迦三尊像」、「宣字座」は姿かたちだけではなく、色つや、そして傷までもが再現されていました。触れて、一緒に写真撮影でき、背後に廻って大光背背面の銘文も発見しました。 (文責 アーキジオ春秋)

3D データから制作された樹脂製原型

高岡銅器伝統技術による再現 釈迦三尊像

井波彫刻伝統技術による宣字座

主催の「400 年を超える高岡市の鋳物技術と 600 年を越える南砺市の彫刻技術を活用した地場産業活性化モデルの構築・展開事業推進協議会」作成の資料に経緯が掲載されており、再掲します。

今回、政府の地方創生事業の支援を受けて、皇学館が連携し、最新技術による国宝法隆寺釈迦三尊像の再現が実現致しました。
東京藝術大学が法隆寺ならびに文化庁から許可を得て、国宝法隆寺釈迦三尊像を計測・解析したデータをもとに、3Dプリンターによる原型を作成、その原型を用い、伝統工芸高岡鋳造振興協同組合、井波彫刻協同組合の職人たちが、地域で受け継がれた鋳物や彫刻の伝統技術により現代への再現に挑戦、最終的に東京藝術大学で仕上げを行い、時代を超えた美の未来への継承を行いました。
この取組みは、門外不出の国宝法隆寺釈迦三尊像を限りなく科学的に複製なもので複製することにより、日本の芸術文化、地域の伝統技術、歴史的美術工芸品の未来の復元技術の発展につながるものであると思っております。

飛鳥が告げる未来
伊東 順二 (東京藝術大学特任教授)

筆をも置かせる美の前では、何えど文化は流えども遥かが直美を失くした、ただ感動に身を浸す、それは造形の力でもあり、時間を超える崇高な芸術の力でもある。
そのような美を湛つ法隆寺釈迦三尊像は日本を一つにして現在のような独自な文化と平和な思想を持つ我が国の基礎となった飛鳥時代に未来をデザインした人々の努力と知識と汗の結晶である。
もともとこの像は仏教の日本への布教を強力に推し進め日本人の心の拠りどころとし、人心を安定、同時に大陸の文化を積極的に導入、律令制国家の礎を築いた聖徳太子の執気平癒を祈念するために日本最初の仏像とされている新作主利が制作を命じられた太子の没後623年に完成したものである。その姿は止利様式と呼ばれる大胆で情深な造形が施し古さ温かある美と基準を思わせるような慈愛に満ちていて見る者を感動と共古への思想に誘う、そしてその美しさは、鋳造の際の炉みの均一性や鋭心の成功取りなど驚異あるとに言え、当時最先端の技術に支えられている。つまり、最高の技術と文化の象徴でもある。
東京藝術大学の最新の科学分析装置3D、ICTなどのテクノロジーそして高岡、市場の日本の伝統技術の協働による今回の釈迦三尊像再現はその意味において私たちの祖である古代人の思いと我が国の文化の基底なる現代に再生するものである。この実現は未来が古代の思いを叶えるのだということを告げている。

国宝法隆寺金堂
釈迦三尊像について
法隆寺金堂に安置される釈迦三尊像は、高さ、光背を含めた三尊の中で最大の像高を誇ります。一光三尊の形式をとり、中尊釈迦如来坐像、左脇侍の薬王菩薩立像、右脇侍の薬上菩薩立像からなります。
また、光背銘文によると、推古天皇30年(622)の2月22日に、聖徳太子の遺徳を偲んで、鞍作止利(鳥仏師)に造像を命じたものであり、翌年の推古31年(623)の4月1日に完成したことが記されています。

1 計測・解析、原型作成
東京藝術大学COI拠点
国宝法隆寺釈迦三尊像を3D計測し、学術的・芸術的見地からデータを補完、より精度の高い3Dデータを作成し、原型を制作しました。
3D計測・データ解析
3D造形ソフトで3D整形
データ造形
2 銅像の鋳造
高岡銅器
(伝統工芸高岡銅鋳物協同組合)
東京藝術大学提供の原型を基に、中型、鋳抜、完成を制作しました。
原型から起こした中型のロウ型
当時の製法に限りなく近づける
大光背の型をはがす
3 台座の木工・木彫
井波彫刻
(井波彫刻協同組合)
本尊を支える台座(宣字座)と光背の台座)を制作しました。
台座の制作
原寸を確認
忠実に再現
4 仕上げ
東京藝術大学COI拠点
鋳造した銅像の造形を仕上げ、1300年の時で変化による色味に表面処理を施しました。
宣字座に座を置き、微なる再現
首座に座像、銘が入れ、宣字座完成
3D計測
データ解析 造形
3D造形出力
金属分析
東京藝術大学にて
鋳型作成
鋳込み
型ばらし
銘の彫金
高岡へ
木工
木彫
井波へ
仕上げ
着色
漆塗り
仕上げ
再現完了
2017年3月

東京藝術大学
東京藝術大学は、その前身である東京美術学校、東京音楽学校の2校が1949年に統合、総合的な芸術系大学として発足。以来、芸術家を養成するとともに、文化財の保護と修復にも関わってきました。2013年には、芸術に関する研究を促進するための新たな取り組みを開始。最先端の技術を駆使して、現代のデジタル技術を継承するとともに、次の時代の伝統技術へと受け継ぐ技術を開発しました。
高岡銅器
高岡銅器は約400年前、高岡の地を開いた2代藩主・二代前田利長が、入った職人を保護育成することから始まります。型枠は型の中心で、江戸時代から型が用いられ、現在も伝統技術として受け継がれています。
その後、鋳造をはじめとする各種金属加工技術は、鍛冶、スズ、アルミニウム等に応用され、時代時代に応じた製品を生み出してきました。
また、その時代時代に応じた技術を開発し、現在では、伝統技術を駆使しながら、新しい分野にも積極的に取り組んでいます。
井波彫刻
井波彫刻は、約400年前、井波別院瑞泉寺の建立に際し、全国から腕利きの彫刻師が集まったことが始まりとされています。
大正時代には、井波彫刻の技術を用いた欄間彫刻の生産が盛んになり、全国に井波彫刻の名を広めました。
その後も、寺院建築の装飾を中心に、神社建築や数寄屋建築の彫刻など、幅広い分野で活躍しています。